

# 東上総地方の中近世遺跡の概要

高田 博

## 1. はじめに

ここで扱う東上総地方は行政的には旧上総国山邊・武射両郡を併せた地域で、現在の山武郡と千葉市土気とを中心とする区域であり、長生・夷隅地域は含まない。地形的には下総台地の東端部分と広大な九十九里平野からなり、台地は太平洋に流入する中小河川とその支流によって樹枝状の小支谷が入り組んだ地形を呈している。

ここに紹介する中近世遺跡は、東金市小野と山武郡横芝町遠山を結ぶ全長約16kmの千葉東金道路（二期）工事に伴い、新たに調査された遺跡である。この調査は平成5年1月から丸3年近く経過し、遺跡総数38か所のうち35か所を終了もしくは調査中である。この間に形象埴輪を出土した小川崎台3号墳や古墳時代から奈良・平安時代にわたる集落跡の栗焼棒遺跡や久保谷遺跡など主に当地方の古代史の成果を付け加えることができた。そうしたなかで、これらの遺跡には中近世の遺構も少なからず検出されている。これらは中近世史を捉える新たな視点となろうと考えられるので、未整理の段階ではあるが次章にそれぞれのテーマごとにまとめた。

## 2. 千葉東金道路（二期）の中近世遺跡

千葉東金道路（二期）は第1図のとおり九十九里平野と接する部分より3km～5kmほど台地の内陸部に入り込んだところを下総台地の縁辺と平行するよう通過し、河川の中流域と接する遺構密度の高い台地部分は前述の栗焼棒遺跡や久保谷遺跡など数か所に限られる。東金市から八街市にかけては広大な平坦な台地が続くが、集落跡は希薄であり、両市を分断するよう馬土手が巡り、防風林などで保存され畑地の境界となっている。佐倉牧の南端の小間子牧の一部であり、当事業によって4か所が調査対象となった。また、八街市滝台では御成街道と交差し、その成果も期待されよう。

市谷遺跡から先の東金市滝沢・酒蔵、山武町森にかけては作田川水系やその南の小河川の最上流域で小支谷は湧水源を持ち山武杉の繁茂する最も山武らしい一帯であるが、古代以降の集落は希薄である。このような地形にシシ穴列が遺存しており、現地表より窪んだものや掘削土を穴の周辺に盛り上げたものなど今でもその一部を認めることができる。事業地内では南は東金市丹尾から北では成東町川崎の9kmの範囲内において検出された。遺跡分布図にないのは遺跡として認識するか否かの問題であろうが、その性格を解明するためにも今後詳細な分布図を作成する必要がある。

事業地の北半分は作田川、境川、木戸川の各河川の中流域を通り、各流域の開発の過程で台地縁辺に集落跡や古墳群を残している。中世に至ると一般的に集落は台地上から消滅し台地裾部に展開するようだが、木戸川が形成した河岸段丘上に集落と墓が展開する中谷遺跡、台地縁辺に整形区画や墓が築かれる久保谷遺跡などの調査が実施され、台地上と台地裾部から沖積地にかけての歴史的景観を総合的に捉える必要性が提起された。

## 3. 最近調査された中近世遺跡

当地方は千葉東金道路など路線網の整備に伴い、近年各拠点ごとに大きく変貌した地域のひとつであり、住宅地や工業団地造成、ゴルフ場造成、山砂採取などの大規模開発が計画され、それに伴い大規模な面的調査が実施されている。現在、それらの発掘調査は減少し整理事業に移行した遺跡が多い。今後それらの報告書が刊行された段階で当地方の様相も一段と明確になろう。刊行された遺跡は次のものがある。

まず、城郭に関しては、昭和50年以降、分布調査の充実や史実に基づいた分析がなされるようになり、小規模な砦や陣屋を含めると『千葉県埋蔵文化財分布調査（2）昭和61年3月』では山武郡

内で64か所を数え、現在では90か所以上に増加している(注1)。立地上好都合な地形的特色からか、印旛沼周辺などとともに密度濃く遺存する地域である。歴史的にみても、長大な谷津や太平洋側の広大な沖積地という生産地をひかえて、武士団が発達し、戦国時代には北部の栗山川流域に山室氏・井田氏、東金から土気にかけては酒井氏など、下総の千葉氏や安房の里見氏らとは独立的な国人領主が存在した。井田氏は後北条氏の影響下に複雑な縄張構造の城郭を残している。

そうした城郭のひとつではほぼ全域が調査されたものに芝山町大台の田向城(注2)がある。伝承(『総州山室譜伝記』)では東方の大台城に移る数年間のみ機能したといわれるが、発掘調査の結果、出土遺物は15世紀代から16世紀後半代までの長期に亘ることが明らかとなった。また、主郭の周囲の空堀内に後北条氏系の城郭に多く見られる障子堀が検出された点をはじめとして、縄張り構造的には16世紀後半の形である。また、土塁の破壊や空堀の埋め立てが行われており、破城行為が推測されている。

また、松尾町山室城跡は急傾斜対策工事に伴って主郭縁辺からその下の腰曲輪部分が調査された。(注3) その結果、14世紀から15世紀の遺物が造成土内から検出され、それ以後に腰曲輪が造成されたことが明らかとなった。また、伝承では山室氏は16世紀前半に飯櫃城に移ったとされるが、「字外城」を含む全体の縄張構造からは、16世紀代に改造及び拡大された可能性が推測されている。

その他、松尾町蕪木城跡(注4)は一部の調査と測量図を残している。また、明治初頭に構築された九十九里平野を見下ろす松尾城跡(注5)も本調査が現在実施されている。南部では東金市では小野城跡(注6)が大堀の調査と測量調査が実施された。東金城跡(注7)は主郭部の確認調査、測量調査が実施され、主郭土塁中に16世紀前半の瀬戸美濃摺鉢が混入していたことから、16世紀後半まで機能したことが確認された。その他、確認調査や測量調査が実施されたものに、井田氏の本城といわれる横芝町坂田城跡(注8)、山室氏の本城といわれる芝山町飯櫃城跡(注9)がある。いずれも充実した縄張構造を持ち、文献や伝承の通り、16世紀後半に機能したことが確認されたといえよう。なお、飯櫃城跡の根古屋地区の確認調査

は県内唯一の例であるが、16世紀代の生活面が確認されたことは注目される。

一方、中世の墳墓については面的調査されたものに大網白里町道塚ヤグラ群(注10)の調査がある。横穴墓4基と火葬墓1基とともに同一レベルに9基が並んで検出された。横穴墓再使用のやぐらが多いなかで板碑や五輪塔を据えたと考えられる小穴等の内部構造が確認され、また、県内最北の例として位置づけられる。

中世の墓域を中心とした単独遺跡の調査例として東金市山田の山中台遺跡(注11)が挙げられる。幅150m、長さ400mほどの細長半島状に延びた台地上の中程に38m×40mの窪地状の台地整形区画とそれより同心円状に巡る溝状遺構2条(幅1.2m~2.5m、深さ0.4m~0.9m)を穿ち、台地整形区画から地下式坑4基、土坑墓26基、土坑多数、仕切溝数条が、溝状遺構から土坑十数基が検出された。また、近世の遺構は2群からなり東群は掘立柱建物跡6棟、地下室4棟、土坑墓5基、土坑多数が検出され屋敷跡の一連の施設と考えられる。

#### 注

- (1) 井上哲朗氏ご教示
- (2) 中野修秀『田向城跡』(勸山武郡市文化財センター 1994年)
- (3) 井上哲朗『松尾町山室城跡』(勸千葉県文化財センター 1992年)
- (4) 平岡和夫『高砂城址』松尾町教育委員会 1976年及び平成3年(勸山武郡市文化財センター調査)
- (5) (勸山武郡市文化財センター海保孝則氏ご教示)
- (6) 伊藤智樹『東金市内遺跡群発掘調査報告書—小野城跡—』東金市教育委員会 1991年
- (7) 西山太郎・井上哲朗『千葉県中近世城跡研究調査報告書第9集』(勸千葉県文化財センター 1989年)
- (8) 加藤正信『同上第3集』1983年
- (9) 柴田龍司『同上第7集』1987年
- (10) 山口直人『道塚横穴・ヤグラ群』(勸山武郡市文化財センター 1995年)
- (11) 吉田直哉『山中台遺跡』(勸山武郡市文化財センター 1995年)





第1図 東上総地方の中近世遺跡分布図